

Carlyle: *Sartor Resartus* 再考

-- SPIRITUAL IMAGINATION WITH THE BIBLICAL FLAVOR --

松藤 亨

倉敷芸術科学大学非常勤講師

(2002年9月30日 受理)

I. Introduction

大学時代小川二郎博士よりカーライルを教えられ、*Sartor Resartus* を学んで興味を持ち、それを卒論に選んでから既に50年、中断の時期はあったが、この半世紀、細やかながらカーライルを学び続け、主に日本英文学会中国四国支部大会で毎年一回計25回以上カーライルに関する研究発表をさせて頂いてきた。このカーライル研究50周年に因んで彼の処女作で聖書の香りを持つ霊的想像の作品 *Sartor Resartus* (衣裳哲学) を再考吟味し、Margaret Rundle の *Thomas Carlyle—Romantic, Victorian, or Both?* も参考にして、Biblical flavor をもつ Spiritual Imagination の作品として要点を纏めてみたい。

Sartor Resartus は無教会基督教の祖内村鑑三が言った様に「カーライルの文体には天上の露おく素晴らしき香りあり、それで単純ではあるが、より深き意味もて心の琴線に触れ、魂の奥に響く」Spiritual imagination を持ち、キリスト教人格主義に立つ優れた教育者、新渡戸稲造をして30回以上も読ましめた古典的価値を持つものであろう。

Sartor Resartus つまり人生と自然・社会が如何に一つの衣--生ける衣により織り成されているか、その衣の内にある魂の探求の要を説き、神への敬虔と信仰なくしては国も個人も栄えることなきを強調している。

1) It was his conviction that without piety and faith in God neither nation nor person has lived or prospered.

カーライルの父は信心深く厳格な石工で、再婚して四男五女計9人の子供を持ったが、トマスはその中で最年長の長男であった。(筆者の兄弟も四男五女！筆者は次男)母は素朴敬虔な女性でその深い知的愛情もて子供達を養育し、夫の聖書の厳しさを和らげていた。トマスの長い年月にわたる不安、疑惑、試練の中にも生涯にわたってトマスの才能を信じ支えていった。この信心深き母の祈る後姿を拝みつつ彼は育っていったのである。彼は親が望んでいた牧師への道を途中で止め、文学、著述への道を探し求め、Edinburgh University では主に図書館で浩く読書に専念した。卒業後、学校教師、家庭教師、翻訳業をしたが、どれも満足がゆかず、数年前結婚した Jane Walsh 所有の Scotland 南西の山の中の人里離れた家に隠棲して、読書と瞑想にうちこみ、ゲーテやシラーからも学び、Edinburgh Review への寄稿などして、思索探究を深め、やがて Inventive Spirit に満たされ、本の形でそれを表現しないでおれなくなった。かくして生

まれたのが *Sartor Resartus* である。ここで参考にこの本における Biblical influence を聖書からの引用の回数を調べて統計的に表にしたものを紹介する。(旧約聖書では Genesis、新約聖書では Matthew が多いことがわかる。)

2)

Old Testament		New Testament	
Genesis	13	Matthew	11
Exodus	6	Mark	1
Joshua	1	Luke	5
Judges	1	John	6
2 Kings	1	Acts	6
Job	1	1 Corinthians	2
Psalms	8	2 Corinthians	1
Isaiah	2	Ephesians	1
Daniel	2	2 Thessalonians	1
Malachi	1	Hebrew	1
	36 times	James	2
		Revelation	3
			40 times
		Total 76 times	

*Words and phrases concerning the Bible or Christianity are numerous.

II. Teufelsdröckh's Biographical Development (Book II)

Sartor Resartus は三巻より成っているが、ここでは Teufelsdröckh を主人公にしたカーライルの自叙伝的色彩をもつ Book II を取り上げその要点を説明してゆく。

(1) Genesis (誕生)

ある静かな黄昏時、気品のある白髪のみかけない紳士が Entepfuhl を訪れ、果樹園の中に住んでいる Andreas Futteral とその妻 Gretchen の前に立ってうやうやしく挨拶し、緑色のペルシャ絹で覆われた籠の様なものを取り出し、下に置いて、

3) "Good Christian people, here lies for you an invaluable Loan; take all heed thereof, in all carefulness employ it: with high recompense, or else with heavy penalty, with it one day be required back." (p.66, SARTAR RESARTUS -- Chapman and Hall, Ltd., 1896 London)

「二人の衆、これは掛替のないお預け物を持って来ましたぞ。精々大切に念入りにそれを扱って下され。何時かお返しして貰いますが、その時は立派なお礼があるか、さもなければひどい罰が当たりますぞ」といって立去っていった。驚いたフュッテラル夫妻は、その籠の覆いを捲ってみると、そこにすやすや眠っている赤ちゃんを見たのである。その側には養育費であろうか、金貨と幼児受洗の証明書がそえてあった。夫婦はこの赤ちゃんを天から授かった大

事な宝として一生懸命育てることにしたのである。天は彼らの努力をよしとし、この子は宇宙の中にあつて Herr Diogenes Teufelsdröckh として一人格に成長してゆくのである。そして New University of Weissnichtwo で the New Science of Things in General (新一般事物学) の教授への運命を辿ってゆく。この赤ちゃんを持ってきた見知らぬ人を Teufelsdröckh は天の父として慕い、お会いしたいと探してゆくのである。

4) Thy true Beginning and Father is in Heaven, whom with the bodily eye thou shalt never behold, but only with the spiritual. (p.68)

彼は天地のすべてのものには名前がある事に気づく。その名前こそ最初の最も重要な衣裳である。そして言葉の不思議、想念、思想が深まり、哲学、詩、宗教と体系化されてゆくのを学び、時 (Time) の不思議、哲理にも目覚めてゆくのである。

(2) Idyllic (田園詩)

「幸福なる幼年時代よ！」と Teufelsdröckh は叫ぶ。夕餉時の美しい光景が目浮かぶ。

5) On fine evenings I was wont to carry-forth my supper(bread-crumbs boiled in milk), and eat it out-of-doors. On the coping of the Orchard-wall, which I could reach by climbing, or still more easily if Father Andreas would set-up the pruning-ladder, my porringer was placed: there, many a sunset, have I, looking at the distant western Mountains, consumed, not without relish, my evening meal. Those hues of gold and azure, that hush of World's expectation as Day died, were still a Hebrew Speech for me, nevertheless I was looking at the fair illuminated Letters, and had an eye for their gilding. (p.74)

「天気の良い夕方には、私は夕飯(牛乳で煮たパン)を持ち出して外で食べる癖があった。私がよじ登る事の出来る、それでなくてもお父さんのアンドレアスが植木梯子を立て掛けてくれればなお楽々と登れる、果樹園の壁の笠石の上に私の粥は置かれた。そこで私は何遍となく日没の時に遠い西の山々を望みながら、私の夕餉を舌鼓打って食べたのである。黄金と瑠璃の空の色、日が沈む時の世界のなりをひそめた静かさは私にはまだヘブライ語であった…」この様に自然の神秘に感動し、その底にある意味を探ろうと世界にも目を広げていった。そして宇宙人生の存在の神秘に自然の四季の移り変わりに、折々の催しにも興味と学びを深めていった。特に母の祈る姿に生きる模範を示され、天と人にと神在すことを教えられていったのである。

6) -- waited-on by the four golden Seasons, with their vicissitudes of contribution, for even grim Winter brought its skating-matches and shooting-matches, its snow-storms and Christmas-carols, -- (p.77)

7) She taught me, less indeed by word than act and daily reverend look and habitude, her own simple version of the Christian Faith. Andreas too attended Church; yet more like a parade-duty, for which he in the other world expected pay with arrears, --- (p.79)

「私の親切な母は私に対して一つの全く何物にも換え難き貢献をなしてくれた。彼女は言葉

よりも寧ろ^{もし}行為と日々の^{うげ}恭しい表情と習慣とによって、彼女一人の単純なるキリスト教信仰を私に教えた。アンドレアス（父）も教会には参った、がむしろ一種の人前の義務としてであって、彼は来世での報酬の事を考えていた様である…」

8) The highest whom I knew on Earth I here saw bowed down, with awe unspeakable, before a Higher in Heaven: such things, especially in infancy, reach inwards to the very core of your being; mysteriously does a Holy of Holies build itself into visibility in the mysterious deeps: --- (p.79)

「私はこの地上に於いて知る最高なるものが、ここに言葉で言い表せぬ畏敬もて、天上に於けるより高きもの前に額づいているのを見たのである。かような事柄はとりわけ幼年時代に於いては幼き者の内部の核心に迄達する。至聖の神殿が神秘の深奥に於いて神秘的に自ら建上^{はげけん}がって顕現するのである」

そうして人間の中に於ける最も神聖なものである敬虔が恐怖というその賤しき包被の中らときわに萌え出るのである。「汝は天上に、又人間の内奥に神が^{いま}在すことを百姓の息子でも知りたいと思うであろう」敬虔と服従 (Obedience) を Teufelsdröckh は学ばされていった。幼少期にこの徳を学ぶ事は大切である。

9) Obedience is our universal duty and destiny;---(p.79)

(3) Pedagogy (教育)

Teufelsdröckhは流れてやまぬKuhbach川が如何に時の永遠を語っているかを想い、Hinterschlag Gymnasium の学校に通い、荒っぽい男の学生達を恐れ、大学ではペダント（学者ぶった）な教授達に失望する。併し印刷されたものには総て興味を覚え、只管読み広めていった。そして passivity（静かに受け入れる態度）を教育の中で体得してゆき、時と永遠への思いを深めていった。

10) -- unutterable meditations on grandeur and mystery of TIME, and its relation to ETERNITY, which play such a part in this Philosophy of Clothes.(p.82)

父 Andreas が死に母も彼も涙に^{なみだ}咽んだが、

11) The unworn Spirit is strong; Life is so healthful that it even finds nourishment in Death.(p.85)

の如く the unworn Spirit は強く生命は死の中からも栄養をとってゆく。それで彼は如何なる時にも still smile を失うことなきよう努めた。the mere Appearance を見抜き、the true Ware を選びとり、訓練にたえ、節約を学んでいった。怠惰を避け、自由と熱心さで多くの言語で多くの文学、理学全般の読書に^{いそ}勤しみ、知識を増やし思考を深めていった。青春の苦悩、疑惑、不安、奇跡の中に光を求め、信仰を失うことなき様努めた。

(4) Getting Under Way (船出)

大学を出た Teufelsdröckh は宇宙の住人として広い世界に船出してゆく。そして考える事の大切さを体感してゆく。単に持つ事よりも何かを為す事の大切さを学んでゆく。

12) To each is given a certain inward Talent, a certain outward Environment of Fortune; to each, by wisest combination of these two, a certain maximum of Capability.(p.96)

内なるタレントと外なる環境の最も賢い調和により最上の可能性が生まれるのである。

13) But for Evil there were no Good, as victory is only possible by battle.(p.102)

世間に出て、矛盾や悪のあることに気付くが、その悪がなければ善もない事、勝利を収める為には battle の必要なる事をも悟ってゆくのである。

内なる激しさに心が乱れても、それをよく抑えて stillness of Passibility を養ってゆく。人間には内に divineness がある事を忘れてはいけない。そして広い世界に船出して lyrical romantic だけでは正しい評価は得られず、歴史的客観的考察の要を覚へてゆく。この事は Margaret Rundle がその著書 *Thomas Carlyle—Romantic, Victorian, or Both?* で述べているテーマでもある。Carlyle は romantic, lyrical な見方より次第に Victorian 的社会的歴史的な面に重点を置くようになって著作もその方向に進んでゆくが、一生を通して romantic, lyrical な性格を内に持ち続けていた。それでその両方 romantic と Victorian の予言的作家としてのカーライルを見てゆきたい。

(5) Romance (ロマンス)

Teufelsdröckh はやがて the heavenly mystery of Love を経験する。そして女性に対しては礼拝の対象の如き感情を抱くのである。それだけ彼は純粹であった。

14) Oh, Happy season of virtuous youth, when shame is still an impassable, celestial barrier.(p.108)

「汚れなき青春の楽しき時代よ！その時においては、羞恥心は尚乗り越えがたき神々しい柵であった」

15) Visible Divinity dwelt in women; to our young Friend all women were holy, were heavenly.(p.108)

「彼女らの中には眼に見える神が宿っていた。わが若き友人にとっては凡て婦人は神聖であった。」

16) That he, our poor Friend, should ever win for himself one of these Gracefuls -- Ach Gott! How could he hope it; should he not have died under it? There was a certain delirious vertigo in the thought.(p.108)

「彼がいつの日かこれら優しき女の一人を己がものとするという事、ああ神よ！彼がどうしてそれを望みえようか。彼はその幸福に耐えかねて死にはしなかつただろうか。それは唯考えただけでも気がぼーっとなって眼がくるめくようであった」

彼はある party で紹介された Blumine という女性と激しい恋に陥って了うのである。

17) "Thou too mayst love and be loved"; and so kindle him,-- good Heaven, what a volcanic, earthquake-bringing, all-consuming fire were probably kindled! (p.109)

「汝も亦愛する事が出来るのだ。愛されうるのだ—そうして彼に火をつけるならば—ああ本当にどんな噴火山的な、地震を惹起する様な凡てを焼盡やきつくすような火が点ぜられることであろう！」

18) To our Friend the hours seemed moments; holy was he and happy: the words from those sweetest lips came over him like dew on thirsty grass; all better feelings in his soul seemed to whisper, *It is good for us to be here*. At parting, with the kind stars above them, he spoke something of meeting again, which was not contradicted; he pressed gently those small soft fingers, and it seemed as if they were not hastily, not angrily withdrawn.(p.115)

「我らの友人にとってはその時は瞬時に短く思へた。彼は神聖で幸福であった。かのいとも優しき唇を洩れる言葉は乾いた草の上の露の様に彼を訪れた。彼の霊の中の凡てのより良き感情が囁くように思はれた。我らのここにおるはよしと。別れる時にブルーミネの手は彼の手のうちにあった。静かなる黄昏に優しき星をいただきつつ、彼は又お目にかかりましようとか何とか言ったが、ブルーミネも否とは言はなかった。彼は彼女の小さい柔らかな五指を静かに抑へた。さうしたらそれは急いでも怒ってでも引き込められなかったように思はれた」

しかしこの初恋の激しく美しい最高潮の状態から早くも失恋破局の時がやってくるのである。Blumine は他の男と結婚させられることになる。別れの時がやってくる。

19) -- she seemed to have been weeping. Alas, no longer a Morning-star, but a troublous skyey Portent, announcing that the Doomsday had dawned! She said, in a tremulous voice, They were to meet no more.--- (p.118)

「彼女は泣いていた様に見えた。悲しい哉、それはもはや暁の明星ではなく、最終の日が来たのだということを告げる凶兆の彗星だったのである。彼女は震える声で言った、私達はもう会うことは出来ません---」

20) "Farewell, then, Madam!" said he, not without sternness, for his stung pride helped him. She put her hand in his, she looked in his face, tears started to her eyes; in wild audacity he clasped her to his bosom; their lips were joined, their two souls, like two dew-drops, rushed into one, -- for the first time, and for the last! Thus was Teufelsdröckh made immortal by a kiss. (p.118)

「それでは貴女御機嫌よう！と彼、幾分なじるように言った…彼女は自分の手を彼の手の中に入れた、彼女は彼の顔を見入った、涙は彼女の両眼に浮かんだ。彼は我を忘れて大胆に彼女を我が胸に抱きしめた。彼らの唇は会った。彼らの二つの霊は二滴しずくの露のようにさっと一つになった—最初にそして最後に。かようにして Teufelsdröckh はキスによって不滅となった…」そして彼は恰も瓦解した宇宙のそのように廢墟の中を奈落に向けて落ちて落ちて行ったのである。

(6) Sorrow of Teufelsdröckh (悲哀)

失恋により突然愛人を奪はれたことを恰も最終の審判と世界の破滅のように物語るかと思へば彼自身の性質はそれが為に弛緩せず、寧ろ一層緊縮して悲しみの中にも思いを新たにして彼は pilgrimage の旅に出るのである。故郷を離れ、山湖森谷を彷徨い歩き、山岳の神聖な偉容、自然の美しく妙なる姿、力にしばし悲しみを忘れるのである。

非常に多くの人々が小さく見えにくくなっているが、その様々の仕事を営んでいる美しい町を見おろして人間の小さな住居地が一つ的人格みたいに思はれ、千思万感の想いをもって人々を見直すのである。百また百の裸の山の峰々が最後の陽光の中に黄金色紫色に輝いて静まりかえっている光景を彼は憧憬の念を以て眺めた。自然が彼の母で神聖であることを知ったのである。空では赤い夕映えの色が次第にうせていき、太陽がもう沈んでしまった時、永遠と無限、死と生の囁きが彼の霊に忍び入ってきた。そうして彼は恰も生死は一如であるように、大地の精がその玉座をかかぬの裡にもっており、彼自身の精神はそれを物語っているように感じた。

近くの道を四頭立の馬車が来て、よく見ると Blumine が結婚したばかりのトゥグッド氏と並んで座っているのがわかり、悲哀を深めた。併し clothes-philosopher になるには新しい時が来て新しい眼識と違った義務を齎すことを知らねばならないし、霊化されねばならない。

21) A new time may bring new insight and a different duty. --- In figurative language, we might say he becomes, not indeed a spirit, yet spiritualised, -- (p.125)

又、人生、世間はよくわからぬ enigma や予期せぬ躓きも多い事を知らねばならない。併しどんな事があっても前に進んでいかねばならない。すべての自然は前へと私に呼びかけるといふ。時が進んでいくように時の子として我々も進んでいかねばならない。そして行為 (action) をしなければならぬ。

22) Nevertheless still Forward! I felt as if in great haste; to do I saw not what. From the depths of my own heart, it called to me, Forwards! The winds and the streams, and all Nature sounded to me, Forwards! Ach Gott, I was even, once for all, a Son of Time. (p.126)

(7) Everlasting No (永遠の否定)

希望と信仰を失いかけていた Teufelsdröckh の巡礼の旅は続く。

23) Man is, properly speaking, based upon Hope, he has no other possession but Hope; -- Faith is properly the one thing needful. --- Martyrs, otherwise weak, can cheerfully endured the shame and the cross; --- (p.129)

人生には如何に希望が大切であるか、疑いは不信へと深まってゆく、その時如何に信仰が必要であるか、この信仰によってこそ殉教者は喜々として死を乗り越えることが出来るのである。神なき心境に陥っていた不幸な若者 Teufelsdröckh よ！併しその不信疑惑の旅路の中にも身近な義務を果たしてゆく時、やがて光が射してくるのである。この永遠の否定の中に早くも永遠の肯定の兆しが見えてくる。

24) Living without God in the world, of God'd light I was not utterly bereft; if my as yet sealed eyes, with their unspeakable longing, could nowhere see Him, nevertheless in my heart He was present, and His heaven-written Law still stood legible and sacred there. (p.131)

「神なくして世界に生きながらも、神の光を全然失ってはいなかった。私のまだ閉ざされた眼がその言語に盡せぬ憧憬を以てして何処にも神を認めえなかったとしても、それでも私の心には神が在し、その天上に記された法はそこにはっきり厳かに宿っていたのである。」

25) From Suicide a certain aftershine of Christianity withheld me: -- (p.133)

「あるキリスト教の余光の様なものが私を自殺から救ってくれた。」と Teufelsdröckh は告白する。

26) Sorrow, Shame, Doubt, Despair. Heart:'from *Know thyself* to *Know what thou can work at.*' (p.132)

「悲しみ、悩みに打克って汝自身を知る事が大切であり、更にそれから何が作り出せるのかを知らねばならない」人間は creative heart をもっているのである。A Child of Freedom として束縛をたち切り、challenging spirit もて困苦に向かい、神の助けをえて God-created world で又新しく生かされていくのである。

(8) Centre of Indifference 無関心の中心

Baphometric Fire-baptism を受けた Teufelsdröckh は wanderer として已にとらわれず悲しみも客観化するよう努め、Self-Annihilation, Objective Observation of Human Affairs and Nature, Indifferent and Innocent Appreciation of Culture and Destiny に進んでゆく。そして自然からも多くを学んでゆく。

27) Nevertheless, Nature is at work; --- Thrifty unwearied Nature, ever out of our great waste educating some little profit of thy own, -- how dost thou, from the very carcass of the Killer, bring Life for the Living! (p.139)

「自然は営みを止めない…つつましやかで骨身を惜しまぬ自然よ…如何に汝は殺戮者の屍からさへも生きる物の生命の糧を作り出すことであるか！」この自然から多くを学んでゆくのである。そしてその教訓を書き出す著作の大切さを認識し、それへの使命に目指してゆくのである。書物の中の書物は Bible である。どの版の聖書でも祈りもて読んでいこう。この様に Teufelsdröckh は天地自然人生の存在活動を客観的に広く観察し、思索を深めてゆくが、それには先達の偉人、英雄、文人の書いた書物から学ぶ事が多いのである。「私は大抵の公設図書館で読書した」と彼は書いている。特に Goethe や Schiller より学ぶ事が多かった。

28) Too-heavy-laden Teufelsdröckh! Yet surely his bands are loosening; one day he will hurl the burden far from him, and bound forth free and with a second youth. 'This,' says our Professor, 'was the CENTRE OF INDIFFERENCE I had now reached; through which whoso travel from the Negative Pole to the Positive must necessarily pass.' (p.146)

「余りにも重荷を負える Teufelsdröckh よ。併し彼の絆は解けつつあるのだ。いつの日か彼は重荷を遠くかなぐり捨てて、自由に再び若返って踊り出るのであろう。こうのが私の今到着した無関心の中心で、誰でも否定の極みから肯定の極みへ旅する者は是非それを通過しなければならぬ」とわが教授は云う。

(9) Everlasting Yea (永遠の肯定)

Teufelsdröckh は Temptation of Wilderness で誘惑に打克って神への信仰を取り戻し、人への愛に目覚めてゆく。神の霊が宿る自然の中を歩き廻り、その不思議な力、営みに打たれた彼は、

29) Or what is Nature? Ha! why do I not name thee God? Art not thou the "Living Garment of God"? O Heavens, is it, in very deed, HE, then, that ever speaks through thee; that lives and loves in thee, that lives and loves in me? (p.151)

「とれとも自然とは何であるか。ああ何故私は汝を神と名づけぬか。汝は「神の生ける衣」ではないか。ああ汝を通して常に語るもの、汝の裡に生きて愛し、我が裡に生きて愛する者は真実実際に神であるか。」と叫ぶのである。

この自然崇拜の気持ちは東洋的自然観に通じるものがあると私は思う。彼は神が自然や人の中に確かに在すことを哲学宗教的に体得し、人への同情を新たにしてくるのである。

30) With other eyes, too, could I now look upon my fellow man: with an infinite Pity. Poor, wandering, wayward man! Art thou not tried, and beaten with stripes, even as I am? (p.150)

「又私は別れの眼を以て私の同胞の人間を見る事が出来る様になった。即ち無限の愛と無限の憐憫を以て。可哀想な迷っている移り気の人間よ！汝も丁度私と同じ様に試みられ鞭で打たれるのではないか。」かくして彼は悲哀の礼拝の心理に導かれる。悲哀を寧ろ有難く拝み、そこから人生の神秘奥義を学びとってゆくのである。これは聖書の「悲しむ者は幸いなり…」の山上の垂訓に通じるものがある。

31) Thus was I standing in the porch of that "Sanctuary of Sorrow"; by strange, steep ways had I too been quided thither; and ere long its sacred gates would open, and the "Divine Depth of Sorrow" lie disclosed to me. (p.151)

そして真に人生を始める諦念の悟りをえてゆく。

32) It is only with Renunciation that Life, properly speaking, can be said to begin.

かくして遂に Everlasting Yea の神髄である「快樂を愛する勿れ、神を愛せよ」に達するのである。

33) Love not Pleasure; love God. This is the EVERLASTING YEA, wherein all contradiction is solved: wherein whoso walks and works, it is well with him. (p.153)

真に神を愛する時すべての矛盾も解決されてゆく。人間の裡には幸福の愛よりもより高いものがある。彼は幸福の代わりに浄福 (Blessedness) を見出すことが出来る。神の祝福の裡に歩み働く者こそ幸あれである。

この様に Spiritual attainment をえて、Inventive spirit を持ちえた Teufelsdröckh は Know what you can を自覚して、良きものを産み出す実行に踏み出すのである。

34) I too could now say to myself: Be no longer a Chaos, but a World, or even Worldkin. Produce! Produce! Were it but the pitifullest infinitesimal fraction of a Product, produce it in God's name! -- out with it, them. Up, up! (p.157)

「私も亦私自身に言うことが出来た。最早渾沌である勿れ、世界になれ、どんな小さな世界でも構はない。作り出せ、作り出せ、どんな詰まらぬ塵^{ちり}より小さい製作物の欠片^{かけら}でもいいから、神かけてそれを作り出せ。起て、起ち上れ！」小さな事でも良き事を立上って自分で出来る事を神に祈りつつ精一杯為してゆくべきである。この経験実践主義的思考は英国の伝統的思考に通じていると思う。

(10) Pause (小憩)

小休憩は大切な次の働きへの stand-by の時と考へられる。Spiritual attainment を成し遂げ立上って為す自分の業を成し遂げる ideal workshop を持つ必要がある。それを為すには先ず brain の働きが大切である。brain を大いに働かせて一般事物学を書いていくのである。それを書く pen の働きは偉大である。pen は wonder producer と彼は云っている。この書く事を calling と自覚した Teufelsdröckh は「私は天に感謝する。今や私の使命を見出したことを。そうして眼に見える程の結果をあげることが出来るかどうかかわからないが、兎に角一生懸命それに精進する覚悟がある」と決意を表明し、この不思議な神秘的な殆ど魔術的とも思へる宇宙の図式解明に乗り出し、Time に関する神秘的観念を深め、特異ともいえる自然観を開陳し、やがて彼独特の衣裳哲学を構成してゆくのである。

35) How all Nature and Life are but one Garment, a 'Living Garment,' woven and ever aweaving in the 'Loom of Time'. (p.163)

「凡ての自然と人生とがただ一つの衣「時の織機」にて織られ、又常に織られつつある“生ける衣”にすぎぬという事、ここにこそ全衣裳哲学の輪郭がありはせぬか。」

そしてこの概観即ち衣裳を通して物事それ自身の内奥を見ることこそ正に衣裳哲学の第一予備条件ではないか。そしてこの第二巻の最後に、合間合間には不動の北斗星のきらめきがなきにしもあらずと思うと結んで希望の光を示唆している。

36) But is not this same looking-through the Shows, or Vestures, into the Things, even the first preliminary to a *Philosophy of Clothes*? --- - Will there be wanting between whiles some twinkling of a steady Polar Star?. (p.164)

III. Closing Words (終りの言葉)

衣裳哲学第二巻のカーライルをモデルにした Teufelsdröckh の精神的成長の自叙伝的作品を見てきたが、これは21世紀に於いてもまじめに人生を探求する青年にとって、又大人にとっても

古今東西を問わず一つの good example となるであろう。そして人生を真剣に思索してゆく人々にとって老若男女を問わず evergreen powerful nourishment を与え続けるであろう。

この衣裳哲学第三巻の最後に、

37) Have we not, in the course of Eternity, travelled some months of our Lifejourney in partial sight of one another; have we not existed together, though in a state of quarrel? (very last sentence of S.R.)

「われらは永遠の道程において、われらの生涯の旅路の数ヶ月を、おたがいに姿のちらと見えるところをあゆんできたではないか。われらはけんかをしながらも、とにかくいっしょに暮らしてきたではないか。」(Sartor Resartus の最後の文)

と述懐してこの本を閉じているが、筆者も結婚して45年妻としばしば喧嘩をしてきたが、神結び給う縁^{えにし}を思い、カーライルのこの言葉に共感を覚えて、長く一緒に暮らしてきた、又働いてきた縁^{えにし}に感謝して、“すべてを益に変え給う”神を信じて、勤めて仲良く許し合い祈り合って、絶えず学びつつ、人生を全うしたく念願するものである。



クレイゲンパトックの家

BIBLIOGRAPHIE (主なもののみ)

- (1) Thomas Carlyle, 1831: SARTOR RESARTUS, THE LIFE AND OPINIONS OF HERR TEUFELSDRÖCKH in three Books (Centenary Edition, Chapman & Hall Limited, London)

* Quotations in this thesis are from this edition.

- (2) T.Matsufuji: 『カーライルその Moral Energy - Twinkling of Truth 魂の文学』、京都あぼろん社、1983。
 (3) 石田憲次訳：『衣裳哲学』岩波書店、東京、1823。
 (4) イアン・キャンベル著、多田貞三訳：『トマス・カーライル』、成美堂、東京、1981。
 (5) Margaret Rundle: Thomas Carlyle - Romantic, Victorian, or Both?
 (6) Ian Campbell, 1993: Thomas Carlyle, The Saltire Society, Edinburgh, UK

CARLYLE: *SARTOR RESARTUS* 再考 — Spiritual Imagination with Biblical Flavor —

Toru MATSUFUJI

*Kurashiki University of Science and the Arts,
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan
(Received September 30, 2002)*

SARTOR RESARTUS (衣裳哲学) implies that all Nature and Life are but one Garment, a 'Living Garment', woven and even aweaving in the 'Loom of Time'. Carlyle teaches us not to be blinded by the Garment of 'Illusion of Truth', but to search for the Spirit, that is, to look through the appearance of things into the very things themselves. He pointed to the Divine directly. It was his conviction that without piety and faith in God neither nation nor person had lived or prospered. 'Twinkling of Truth' may be seen from time to time, if we are sincere. By learning also from *Thomas Carlyle – Romantic, Victorian, or Both?* by Margaret Rundle, I'd like to reconsider his maiden work as the work of Spiritual Imagination with a Biblical flavor.

He sees all Nature as Cathedrals, Nature as Bible and its working as Sermons, and thinks Christianity as a 'Living Myth'. In this society of Contradictory Reality, he proceeds from the British Romantic Concept of "Know thyself" to "Know what thou can work"--a more social, historical development. I'll try to follow his valuable steps of spiritual journey and process to salvation once more.

In Book II (biographical) Teufelsbröckh, the hero representing Carlyle, pilgrimages from 'Everlasting No' (Sorrow, Shame, Doubt, Despair) via 'Centre of Indifference' (Self-annihilation, Objective Observation of Human Affairs and Nature, Indifferent and Innocent Appreciation of Culture and Destiny) at last to 'Everlasting Yea' (Belief in God, Love to Man, Worship of Sorrow, Love not Pleasure, Love God, Up and Work) and finds his life mission of writing with 'Inventive Spirit and Inward Energy.'

He also reveals his experience of lost love and remarks: "Love is really mystical, heavenly and powerful." Lastly Carlyle finishes his "Clothes Philosophy" with the sentence: "--- have we not existed together, though in a state of quarrel?" I feel familiar with his humor as I do quarrel with my wife.